慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジェイ・ エス・ ミルと経済学の定義
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.8 (1922. 8) ,p.1186(138)- 1198(150)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220801-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

我國に於て、各省官錢局、官銀號及び官銀行の整理も緊急のこととなり、又舊式金融業の淘汰整理、殖邊銀行、勸業銀行、鹽業銀行等の新式銀行の改善、刷新農工銀行の設立及び普及等幾多の重要なる興革を行はざる可からず、此等の目的を達せんとせば、第一、銀行資金を充實し、金融機關たる機能を發揮せしめ、銀行業者をして進歩せる銀行の智識技倆を習得せしむべし、第二、金融統一を計り、銀行法規を完備し、其厲行を强制し、又は其營業を監督せざる可からず。

ジェイ・エス・ミルと經濟學の定義（二）

榎本鑛治

前述せる如くミルは、當時多くの科學に與へられた定義を以て甚だ不完全極まるものであると論じたが、彼に從へば經濟學も亦同樣に、嚴密なる論理的原理の上に形成された定義、否より容易く會得せらる可きもの、即ち定義せられたものと正確に共通せる外延を有する所の定義（a definition exactly co-extensive with the things defined）をさへ持たないのである。併し是れがために經濟學の眞實なる境界が、少なくとも英國に於ては、實際に誤解若くは看過せられる迄には至らなかつたが、其結果は斯學の研究方法の不定なる―而も屢々誤れる―樣々の概念を誘き出すに至つた。然らば斯の如きミルの主張は妥當でありや否や。ミルは自說を確證するために、當時一般に是認せられて居た經濟學の定義を考究したのである。

眞先にミルの槍玉に擧つたのは、

「經濟學とは、如何なる方法を以てすれば一國を裕福ならしめ得るかを敎ふるのを職分とする科學である」

と云ふ定義である。彼に從へば經濟學の構成要素を斯の如く見るのは、或程度迄アダム・スミスが彼の大著國富論に與へた題目と排列とに助長せられたのである。右の定義は、經濟學の本質と對象とに關して通俗の見解を述べて居ると云ふ點より見れば、中らずと雖も遠からずてう部類に屬すると云へやう。

併し若しも、色々の言葉の或確定的形式に於ては見出されないが、其主題を意味する樣々の流行樣式からの抽象過程に於て始めて到達せられる所のものを、定義と呼び得るならば、夫れは、學（science）と術（art）との―密接に關係すれども―根本的に相違せる觀念を混同するものであると云ふ決定的抗議に遭遇するのを免れ難いやうである。是れは右の定義に加へられる非難である。抑も學と術との二觀念が夫々別異のものであることは、恰かも悟性（understanding）が意思（Will）と異なり、又文法に於て直接法が命令法と異なるやうなものである。一は事實（facts）に關係し、他は敎戒（precepts）に關係する。學は各種の眞理（truths）の集團であるが、術は各種の準則（rules）換言せば行爲に對する各種の命令（directions for conduct）の集團である。即ち學の用語は「是れは然り」、「是は然らず」、又は「是は發生す」、「是は發生せず」と云ふのであるが、術の用語は、「是をなせ」、「彼れを避けよ」と云ふのである。學は或現象（phenomenon）を認めて、之に關する法則（law）の發見に努めるのであるが、術は或は目的（end）を志して、之を遂行す可き諸手段（means）を探求するのである。

故に若しも、經濟學が一個の科學（學）であるならば、夫れは實際的規則の集團であり得ない。併し經濟學が全然無用の科學でないとすれば、實際的規則は、經濟學の上に築かれ得なければならない。例へば自然哲學の一部門たる機械學は、運動の法則と所謂機械力の特性とを說くのである。然るに、實際的機械學の術は、如何に吾々は夫等の法則及び特性を利用して、外的自然に對する吾々の支配を擴張す可きであるかを敎ふるに在る。術は、常に其主題に關係する科學的知識の上に確立せられなければ、術ではない。是れなくんば、夫れは經驗論（empiricism）であつて、哲學（philosophy）ではない。故に一國の富を增加させるための諸準則は、一個の科學ではないが、科學の成果である。即ち經濟學其物は、一國を如何にして裕福ならしむ可きかを敎ふるものではない。併し一國を裕福ならしむる諸々の手段を判斷する資格ある者は、皆先づ第一に經濟學者であらねばならぬ。（註一）

斯くミルは論じ去つて、第一の定義は學と術とを混同して居るとした。然らば次に彼の批評を受けた經濟學の定義は、如何なるものであるか。

七

ミルに從へば、敎養ある人々の間に最も廣く是認され、又經濟學に關する數多の著書に述べられた定義は、

「經濟學とは、吾々に敎ふるに、富の生產、分配、並に消費を制規する諸々の法則を以てする、」

と云ふのである。此種の定義には、屢々ありふれた說明を附加する。例へば經濟學は國家に關係するもので、其の狀恰かも家內經濟（domestic economy）が家族に關係するに、粗ぼ似て居ると云ふの類である。（註二）此定義は第一の定義に於て指摘したやうな缺點もない。經濟學が學であつて術でない所以を忘れては居ない。蓋し此定義は自然の諸法則に關係するが、行爲の諸公理には關係しないからである。

ミルに從へば、右の定義に於けるやうな抗議を蒙らぬが、夫れに附隨する說明が無難に收まらない。何故と云ふに夫れは、旣に片付けられた、現今の漠然とせる經濟學の想念に迄吾々を引戻すからである。即ち經濟學は眞實に科學であると同時に、定義に際しても科學であると述べられて居る。然るに附隨的說明に於ける家內經濟は、夫れが樣々の原理に支配せられる限り、一個の術である。家內經濟を組成する樣々の規則、即ち用心の公理（maxims of prudence）は、欲求するものを正規的に供給せられる家族を維持し、又何等か一定の手段を用ひて最大可能量額の有形的慰安と享樂（the greatest possible quantity of physical comfort and enjoyment）とを確保するためのものである。勿論經濟學の有益なる成果、即ち斯學の大なる實際的應用は、最も完全なる家內經濟が或家族のために成就する所に似た、何等かの事を、一國のために成就するに在る。併し此目的が假令實現せられたからとて、其目的を遂行し得る規則と、經濟學とは、依然として相違するのである。夫れは、恰かも射擊術と投射物の原理との間に於ける、若くは數學的陸地測量の規則と三角法てう科學との間に於ける相違に似て居る。

然らば右の定義は、完全無缺であるか。ミルは之を否定する。但し右の定義が初步の研究に於ける論文の定義ならば、別に抗議を挾むものではない。何故と云ふに初步の定義を與へる目的は、決して重大なる意義を有しないもので、要は研究の便宜と、今より研究せんとする題材

の關係に就て、或一般的の豫想をば、初學者の心情に暗示するに在るからである。即ち眞に初歩の定義に於ては科學的精密さは、要求せられないからである。併し右の定義が、斯學の主題の全範圍を綿密に研究した結果與へられたものであり、且又諸科學間に於ける經濟學の正確なる地位を示すものであるとすれば、其僭越は、到底許し得るものでない。

抑も經濟學とは「富の生産、分配、並に消費を制規する諸々の法則の科學」であると云ふが、其富てう言葉は、煙霧の如く浮動する聯想の雲霞に依つて包圍され、而も其聯想を通して見られる何物をも明白に說明することが出來ないのである。ミルは狩說法を用ひて其箇所を補足して居る。即ち富とは、何等の勞働を用ひずして、無限量に獲得せられ得るが如きものを除き、人類に取つて有用若くは快適なる總ての物件を云ふ。(all objects useful or agreeable to mankind, except such as can be obtained in indefinite quantity without labour) 總ての物件と云ふ代りに或學者は、總ての物質的物件 (all material objects) なる言葉を用ふるが、其相違は現在の場合に何等主要のものではない。(註三)

因にミルが其著經濟學原理に於て採用した富の定義は、Essays に於けると同樣である。即ち富とは、交換價値ある有用若くは快適の物件一切 (all useful or agreeable things which possess exchangeable value) を云ふ。換言すれば富とは、何等の勞働、若くは犧牲を用ひずして欲求せる量額丈け獲得せられ得る物件 (those which can be obtained in the quantity desired, without labour or sacrifice) を除外したる、有用若くは快適の物件一切を云ふ。併し以上引用した富の定義を以てしては、ミルの云ふ如く、長い間討論せられた疑問、即ち所謂非物質的生産物 (immaterial products) は富と認められるか何うかと云ふ疑問が、不定の儘に殘るのである。詳言すれば勞働者の熟練、又は身心に於ける何等か他種の生得、乃至習得の力 (any other natural or acquired power of body or mind) の如きものは、之を富と稱し得るか何うかと云ふ疑問である。併し是れは、現在左迄主要視するに足らないと共に、後日詳述する機會があらうから今は略する。(註四)

然らば富を右の如く定義した結果、經濟學と自然科學との間に、如何なる相違を見出す可きか。是れが問題である。ミルは之を如何に論じたか。

八

ミルは曰く、「今吾々は生産のみに限定するに、若しも人類に取つて有用若くは快適なる總ての物件、否物質的物件の生産に關する諸法則が、經濟學の中に包含せられるとすれば、經濟學の結局は何處であるか、是れを斷言するのは決して容易な業ではないであらう」と。例へば小麥と家畜とは物質的物件であつて、人間のために甚だ有用なものである。前者の生産に關する法則は、農業の原則を包含し、後者の生産は家畜飼育術の主題である。若し家畜飼育術が眞に一個の術であるならば、必ずや生理學の上に其基礎を置かねばならぬ。又製造物品の生産に關する法則は、化學と機械學との全部を包含する。斯く云へば、地球の內部より採掘せられる富の生産に關する法則は、地質學の大部分を包含せずして出發せられ得るものではない。

故に若しも或定義が、事實上廣汎なる範圍に亙るならば、假令會得せらる可き限界が述べられないにしても、吾々は其定義を文字通りに解釋す可きではないと推定せねでならぬ。思ふに

經濟學の關係するものは、富の生産に關する法則中總ての種類の富に適用せられるが如き法則があると云へやう。換言すれば其法則は、他の全然異なれる科學の主題を形成する特殊的職業の細目に關係するものである。

併し前述の如くであるならば、經濟學と自然科學との相違は、容易に知ることが出來ない。今他の部門の知識に就て見るに、例へば動物學又は鑛物學の如きは、之を二分して、一は總ての動物若くは總ての鑛物に共通な性質を取扱ひ、他は夫々特殊的種族の動物若くは鑛物に特有な性質に關係するとはしない。斯く區別せざる理由は、甚だ明瞭である。何故と云ふに動物若くは鑛物の本性に關する一般的法則と、特殊的種族に特有な性質との間には、性質に於ける(in kind)相違が全然ないからである。一般的法則と特殊的法則との著しい類似は、恰かも一般的法則に於ける一の法則と他の法則との關係に似て居る。概して特殊的法則は、唯だ相互に變改せる種々の一般的法則を複合した成果に過ぎない。

故に前者は一般的であり、後者は特殊的であると云ふ理由に基いて、一般的法則と特殊的法則とを區別するは、便宜てう最强の動機と、心情の自然的傾向とに背馳するものである。何れにしても、性質に於ける相違を以てするのは、極端な區別である。依つてミルは、先づ自然科學と經濟學との相違を求め、次に其上に彼の定義を確立するのである。

併し今日迄一般に認められて居る、經濟學の分野と、自然科學の分野とを區別する境界は、決して總ての種類の富に關する眞理と、或種の富に關する眞理との區別に合致するものではない。例へば運動の三則（three laws of motion）と萬有引力の法則（law of gravitation）とは、人類の觀察が今日迄展開されゝ範圍内に於て、總ての物體に對して共通のものである。故に是等の法則は、總ての富の生産に關する法則に包含せられるが故に、經濟學の一部分を構成するものと謂はねばならぬ。諸種の産業上に於ける過程は、僅かの部分も槓杆（lever）の性質に依存せずには居られぬ。併し其故を以て、斯る性質を經濟學の眞理の中に包含させるならば、夫れこそ奇妙な分類となる。然るに近代の經濟學は、自然科學の或部門に屬するやうな、全然特殊的にして專ら特殊的種類の物質的物件に關係せる樣々の研究を包含するのである。例へば穀價を制規する情況を研究するが如きは、恰かも農夫の有する知識と等しく、總ての富の生産に共通なる法則に取つては殆んど無關係である。其他鑛山や漁場の地代、乃至貴重金屬の價値等の研究も亦然りである。而も是等の研究は、依然經濟學の中に正確なる地位を有す可きものとして、一般に認められて居る。

茲に於て、經濟學と自然科學との眞實なる區別は、主題の本質よりも一層深遠なる或物を求められねばならぬ。經濟學と、總ての有用なる技術の科學的基礎とは、事實上同一の主題を共有する。即ち人間の便宜と享樂とに資する樣々の物件が、双方の主題である。併し經濟學と諸々の技術とは、全然異なつた知識の都門に屬するのである。（註五）

九

ミルは、經濟學と自然科學との眞實なる區別を求めるに先立つて、到達せられたる、若くは到達し得る、人間の知識の全分野に留意した。曰く「其分野自躰は明白に二個の區劃に分離せられて居る。……然らば其分野とは如何な

るものぞ。自然科學と、精神的又は心理的科學とが、是れである」と。併し吾々の知識の二個の部門に於ける此相違は、其關係せる主題に存するものではない。何故と云ふに、假令夫々の最も簡單なる、又最も初步なる部分に就ては、双方が別個の主題に—即ち一は人心に、他は人心以外の凡ゆる事物に—關係することは、眞理に接近するに從つて云ひ得られるにしても、此區別は、第二分野のより高き部分の間に於ては、其位置を保持しないからである。例へば政治學又は法律學を何人が自然科學であると云ふであらうか。將た或は、兩者の人心に關係することは、物質に關係すると同樣であるとは、明白でないとするか。尙ほ音樂、繪畫等の理論を見るに、夫々の關係した事實が全然物質の部類にも、又人心の部類にも屬すると、何人が敢えて斷言するであらうか。

茲に於てミルは、次のやうに叙述して、自然科學と精神科學とを區別する理由とするのである。人間と自然との凡ゆる關係に於て、吾々が人間を考察するに、自然の上に作用するものを以てすると、或は又自然より種々の印象を受けるものを以てするとを問はず、結果即ち現象は二種の原因に依存する。一は、作用する物體(object acting)の性質であつて、他は、作用を受ける物體(object acted upon)の性質である。屢々發生して、而も人間と外的事物とが共同に關係したものは、總て物質の法則と、人心の法則との共同作用に基づくものである。從つて人間の勞働に依る穀物の生產は、人心の法則と物質の法則との成果である。即ち物質の法則は、地中に種子を發芽させる土壤と、植物の生命との性質、及び種子の發育に必要なる肥料を施す人躰の性質より成り、又人心の法則は、人間が生活資料を所有しやうと欲求し、從つて其獲得に必要なる各種の手段を選定すると云ふことに存するのである。

凡そ人心の法則と物質の法則とは、其本質上甚だ相違する所があるから、是等を同一研究の一部として混同する時は、合理的排列の原則一切に反するであらう。故に總ての科學的研究方法に於ては、何れも別個の取扱を受けるのである。斯の如くして、物質の法則と人心の法則とに依存する合成的結果、即ち現象は、總て二個の全然異なれる科學か、又は或科學に於ける二部門かの主題となることが出來る。即ち一は、物質の法則にのみ依存する範圍に於ける現象を取扱ひ、他は、人心の法則に依存する範圍に於ける現象を取扱ふのである。

右樣の論述に基づいて、ミルは、自然科學と心的若くは精神的科學との區別を試みた。

（一）自然科學とは、物質の法則、及び物質の法則に依存する範圍に於ける總ての複雜せる現象を取扱ふものであり、又

（二）心的若くは精神的科學とは、人心の法則、及び人心の法則に依存する範圍に於ける總ての複雜せる現象を取扱ふものである。

扨て多くの精神的科學は、自然科學を豫定するが、精神的科學を豫定する自然科學は、甚だ少ない。何故と云ふに、例へば地震や惑星の運行の如き現象は、主として物質の法則に依存して、人心の法則には全然無關係であるからである。從つて人心は、知識の容器としてのみ存在し、其結果を生來する原因としては、存在しないやうに見える。併し人心の法則にのみ依存する現象は絕無である。現に人心の現象其物すら、部分的には人體の生理的法則に依存する有樣である。故に人心の純粹なる科學を包含せる心的科

學は、悉く樣々の物質的眞理を無視することが出來ない。加之、通常は自然科學が最初に研究せられるから、心的科學は自然科學を豫定し、而して自然科學の捨てゝ顧みない複雜の現象を取扱ふのである。

以上の叙述は、明白に生產の術に依屬する各種の科學と、經濟學との關係を精細に盡して居るであらう。（註六）

十

富を構成する物件の生產に關する法則は、經濟學の主題たると同時に、自然科學の主題でもある。併し夫等の法則中に於て、純然たる物質の法則の如きは、專ら自然科學に屬するもので、其他の人心の法則のみが經濟學に屬するものである。要するに最終に於て經濟學は、結合せられた人心の法則と物質の法則との成果を綜合するのである。

故に經濟學は、總ての自然科學を豫定する。從つて經濟學は、斯る自然科學の眞理の中、人類の慾望（wants）に依て要求せられる物件の生產に關する眞理を悉く是認するのである。否少なくとも、其過程に於ける自然的部分が、必ず生來するのは、勿論の事とするのである。次に人心の如何なる現象が、斯の如き同一物件の生產と分配とに關係するかを研究する。是に於てミルは、特に斷つて曰く、今生產と分配と呼んで、普通の經濟學者が用ふるやうに、生產と分配と消費とは云はないと。彼に從へば、消費を除外するには理由がある。ミルに云はせれば、普通の經濟學者のやうに、消費の考察は、生產及び分配の考察と分離することの出來ないものであると思惟するよりは、寧ろ經濟學は富の消費に無關係であると、吾々は主張するのである。別個の科學の主題として、富の消費に關する法則が存在するか何うかは、知らない。畢竟消費に關する法則は、人間的享樂の法則（laws of human enjoyment）に外ならないと。經濟學者は、未た嘗て消費を其自體のために取扱つたことがないけれども、彼等は常に、如何なる狀態に於て各種の消費が富の生產と分配とに影響を及ぼすかと云ふ研究の目的を以て、消費を取扱つて居たのである。（註七）ミルに依れば、普通經濟學に關する論文と稱するものに於て、消費てう項目の下に取扱はれる主題は、次の如くである。

（イ）生產的消費と不生產的消費（productive and unproductive consumption）との相違

（ロ）過多に存する富に就て、其生產を繼續すること、及び生產せられたものゝ過多なる部分に就て、其上の先產のために利用せられることが、可能なりや否やに關する研究、

（ハ）課稅の原理、詳言すれば（一）各種の租稅は何人の納付する所であるか、即ち分配の問題、及び（二）各種の租稅が生產の上に及ぼす狀態は何うであるか、

即ち是れであるから、結局消費に於て取扱ふものは、生產か分配かになるのである。經濟學は、純粹なる人心の科學より斯る現象の法則を借用し、且又斯る自然的法則と關係して作用する心的法則に如何なる結果が隨伴するかを研究するのである。從つて有用なる物件の生產に關する自然的法則は、總て等しく經濟學に依つても豫定せられるのであるが、併し經濟學は、其大部分を綜括的に豫定して、其詳細には何等の叙述を加へないやうに思はれる。併し土壤の生產高は、勞働の適用を增加すると共に、增加の割合が漸減すると云ふが如き少數の事柄に就ては、細說の必要がある。斯くて夫等の眞理は、

夫れを包含した所屬の自然科學から借用せられるやうに思はれる。(註八)

右は後段に細說する所と非常な關係を有するし、又私も聊かながら補足する所があるから、特に注意を要する。然らば上來縷述した所に基いて、ミルの與へた經濟學の定義とは如何なるものであり、而して彼が夫れを如何に論證したかは、紙面の都合上次回に讓る。

(註一) J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, pp. 123-4.

(註二) op. cit., pp 124-5. 因に家内經濟よりの類推に依つて經濟學に定義を與へたものに、Mrs. Marcet's Conversations on Political Economy, 1817. があると云ふが、私は未だ夫れを一讀しないから、唯だあると云ふ小話丈けに留めて置く。(J. Bonar, Philosophy and Political Economy p. 242, note.) 併しミルの父たるジエイムス・ミルが、其著經濟學要論の開卷劈頭に於て、經濟學に與へた定義は、明かに其子ジヨン・ミルの批評を受けざるを得まいと思ふ。(James Mill, Elements of Political Economy, 1821, P. 1.)

(註三) J. S. Mill, Essays, pp. 125-6.

(註四) J. S. Mill, Principles, p. 9.

(註五) J. S. Mill, pp. 127-9.

(註六) op. cit., pp. 129-32.

(註七) ミルは、前揭論集の第二の論文に於て、消費が生産の上に及ぼす影響を論じて居るが、是れは他日紹介する積りである。

(註八) op. cit., pp. 132-3.

新刊紹介

左右田喜一郎著「文化價値と極限概念」

菊判四八四頁　定價參圓　岩波書店發行

科學的認識の二元性を立するに、方法論的形式の單純なる經驗的認識主體の Auffassugsform に求めんとするリッケルトの所說を正しく解することに因て开を超越して「認識對象其自身に於て合理的なるものと非合理的なるものとが終極に於て分離せられざるべからずと云ふ吾等が認識機關の約束に依る」ものなることを以てし、自然科學對歷史科學の二元的科學論あり得る所以を主張し、延ひて經濟生活を對象となす經濟學は、其の認識目的非合理的なる認識素材に制約せらるゝものなるが故に當然歷史科學に屬さゞるべからず、而して「經濟學の認識目的に內容的決定を與ふる das aussere Merkmal は貨幣概念にして之に Bezugnahme することによつてのみ經濟學に特殊なる認識目的は吾々の認識の上に表はれて來、之によつて經濟生活は一種の歷史生活として他の人類生活と區別せらるゝに至る」而かも「經濟現象が人類生活全般の一面的解釋として可能となり而して經濟學の對象となり得る爲には一般的文化價値——歷史的生活の中心思想たる Kultur によりて制約せらるゝを要すとの意味に於て、即ち一の論理的當爲としての——に係て其の存在を見而して尙又之と區別せられて特殊の存在を認め得べき者でなければならぬ。即ち文化價値の內、殊に經濟的なる或特有なる價値に beziehen せられて初めて經濟生活は我等の認識に上り來りかくして抑も經濟生活は可能となる。此の如き論理上の Sollen は經濟生活が人類生活の一方面的解釋なりとの理由により「經濟的文化價値」と稱すべきである」と論じ、經濟學の可能を立證すると同時に全科學體系に於ける其の地位を決定したる左右田博士の學的功績は其の名著「經濟哲學の諸問題」と共に既に周知の事實である。

「文化價値と極限觀念」は博士の第二論文集にして博士其の後の思索的產物の集成である。收むる處、篇を分つて二となし第一篇は「價値哲學研究」にして、價値哲學より觀たる生存權論、文化主義の論理、價値の體系、個別的因果律の論理、附するに平等主義の一考察、價値生活としての人生、及び個別的因果律の論理に關する田邊博士の質問並に之が應酬等より成り、第二篇には、極限概念としての文化價値、合理性對非合理性の問題を通じて觀たる「極限概念の哲學」等を收め題して「極限概念の哲學研究」とす。

曾て「經濟哲學の諸問題」に於て學び而して